

真木洋三

ポールシフト



真木洋三 (まき・ようぞう)

1926年、福岡県生れ。気象技術官養成所(現在の気象大学校)を卒業、気象台に勤務。のち、九州大学経済学部を卒業、読売新聞記者などを経て、1981年、読売新聞社を定年退職、文筆業に専念。

主著「爆殺の大統領空母」(祥伝社)

「小説銀行管理」(日本経済新聞社)

「出向を命ず」(日本経済新聞社)

「横断人脈」(実業之日本社)

「仕手株天井を打つ」(徳間書店)

「ヤング・ソルジャー」(日本経済新聞社)

ボールシフト

昭和五十六年十一月十日 第一刷発行

定価 八九〇円

著者 真木洋三

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二一三二／郵便番号一一二
電話・東京(〇三)九四五一一一一(大代表)
振替・東京 八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

©真木洋三 一九八一年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします

目次

第一章	脳血管のバイパス	5
第二章	凍死したマンモス	29
第三章	産業スパイ	59
第四章	ケルプ号	81
第五章	温室栽培	103
第六章	超集積回路	125
第七章	ムーとアトランティス	148
第八章	ブラック・ファイル	174
第九章	天体X	199
第十章	地球再生の虹	235

装
幀
上
原
徹

ポ ー ル シ フ ト

第一章 脳血管のバイパス

1

津雲達介は、東京・丸の内にある津雲産業株式会社の七階の会長室で、秘書課長の丸田浩一が差し出す書類を受け取った直後、顔面蒼白となり、机にうつぶせになった。

丸田は、会長、と呼んだが、返事がない。すっかりあわてた丸田は、机上の電話で救急車を呼んだ。十二月三日の冬にしては暖かい日で、会長室の壁の電気時計は、午前十一時十分をまわったところであった。

救急車の担架たんかが会長室に到着するまでのあいだ、丸田は、ずんぐりした体をこまめに動かしまわった。秘書課員を動員して、達介を応接セットのソファに寝かせた。経団連ビルに向いていた達介の長男で社長の卓雄に急報する一方、葉山の達介宅にも電話を入れた。津雲産業ビル内に診療所がな

く、神奈川県追浜の工場に診療所が置いてあるのを口惜しがりながら、居あわせた役員や幹部連中にも会長の急変を告げた。

担架にのせられた達介は、救急車で、虎の門の福原病院に運ばれた。丸田をはじめ役員二人が救急車に同乗した。応急手当てをうけた達介の容体がどうなのか、救急隊員に聞き出せぬまま、すぐ病院長の福原の診断をうけた。

やがて社長の卓雄もかけつけ、

「どうなんだ」

緊張した顔で丸田らに質問したが、閉ざされた診療室には卓雄すら入れなかった。

卓雄らがいらだたしい時間を過ごしているのを見越していたかのように、若い女医の田島道子が診療室からあらわれた。

「診察の結果がわかりました」

静かな口調で告げた。街ですれ違っても道子の美貌は印象に残るほどである。それが白衣のせい、清潔さのなかに気品があり、居あわせた男たちは、会長の病状の質問を一時忘れたほどであった。

「院長がじかに執刀します。脳血栓です。バイパスの血管をもうけることで、ほとんど正常に復します」

道子の説明のあと、卓雄が息をのみ、すぐに、せきたてるように訊ねた。

「頭蓋骨を切り開くのですか？」

「ええ」

「すると、親父の自慢の黒髪は、どうなりますか？ 丸坊主になるのですかね？」

「もちろん、手術の邪魔になる髪はそらねばなりません」

卓雄は、六十九歳にしては黒々としている父の髪が、きれいにそり落とされたのを想像して、顔をしかめた。しかし、肝腎なことは、本当に手術のあと正常に復すのかどうかにかかっているのに気づいて、

「生命にはもちろん異常はありませんね？ 手術後、よいよいになるとかの心配は？」

かなり気が短い性格なのをまる出しにして道子に質問した。こうした質問には若いながらも彼女は慣れているらしく、

「いまは、レーザー光線によるメスなど、手術の器械類は非常に進んでおります。それに、こう申しては、言い過ぎかもしれませんが、院長は脳外科の権威ですので、ご安心ください。ほとんどの場合、正常に復しますが、万一、ということも考えられます」

「万一とはどんな場合でしょう？」

卓雄の畳みかけるような訊ねかたに、彼女は、微笑を浮かべながら、こうかわした。

「脳血管撮影で、正確に血栓の場所は掴めます。でも、科学技術の力では、解明できぬほどに複雑で神秘的な面が人体にはあるのです。いままで、似たような病状のかたを何人も扱い、手術に成功していますが、個人差はあるのです」

「個人差があるぐらいは、わかりますよ。でも、親父の場合、かけがえのないからなんです。世界的にも名を知られた父に、万一のことでもあれば……」

卓雄が興奮して、父を世界にも名の通った人物と言ったのは決して過言ではなかった。丸田の急報で救急車が駆けつけたのを、丸の内警察署詰めの記事たちが知り、津雲達介倒る、のニュースはすぐに兜町を駆けめぐった。午後一時の後場の立ち合い開始直後から津雲産業の株は売りをあび、三十余円も下げた。その下げ幅は達介の存在がいかに大きいかを物語っていた。手術が成功し、旧状に復したニュースが流れるまで、売りは続きそうであった。兜町にもショックを与えるのを道子は見通して

でもいるようで、

「なにしろ年間売り上げ七兆三千億円に達するのですから、わが国を代表する企業と申せますわ。兜町がショックをうけないよう、院長は慎重を期すことでしよう」

むしろ卓雄を論すような口調に、そばにいる丸田は感心し、かすかな吐息を洩らした。女性の場合、津雲産業の売り上げ規模まではなかなかわからぬものだ。それをこの女性は正確に言つてのけた。

「院長先生にお会いして、ひとこと、父をよろしく、と頼みたいのだが……」

卓雄は、執刀もしない女医といくら話しあつても無駄だ、と思つていようである。少し横柄ともとれる卓雄の言い分にも、道子は、

「もちろん、院長もお会いします。詳しいデータが出ましたなら、すぐにも」

言い終わつて、卓雄らに軽く頭を下げ、診療室に消えた。

卓雄らは廊下の端の椅子にすわつて、道子に呼ばれるのを待たねばならなかった。椅子にすわると、卓雄は、丸田に、

「葉山に知らせたのか？」

落ち着きを取り戻して訊ねた。

「ええ、一報だけでも、と思いまして」

「生命に別状はなさそうだ、と会社の役員や幹部に電話しろ。葉山の娘にもな」

丸田は赤電話の置いてある玄関わきのロビーまで行き、社長に言われた通り電話を入れた。葉山の達介宅に電話を入れると、卓雄の娘で、達介の孫の麻里は、東洋芸大を出て、病院に向かいつつあるとのことであった。東洋芸大でピアノのレッスン中に祖父の急変を知り、病院に駆けつける麻里を思うと、少し気の毒な思いがしてきた。いまさっきの女医の説明では、脳血栓の手術なんて、たいして

大騒ぎするほどでもなさそうである。

それにしても、机の上にうつぶせになった会長の顔面の蒼白さには度肝を抜かれた。もう二度とあんな場面におつかるのは御免である。できれば、会長専属の秘書を置き、その秘書に、いざという場合の連絡係をさせたい。応急的な措置をとれる医者もほしい。彼はそう思いながら赤電話から離れた。

先代津雲松一が一代で津雲産業を築き上げたあと、二代目の達介が、コンピューターや絵と音の出るレコードのビデオディスクなどへ積極進出し、世界的な企業へのし上げた事情は、あの女医さえも知っているに違いない。その超大企業の会長が、救急車の担架にのせられ、病院に運ばれる図は、あまり感心できない。

ふと、美貌の女医を会長専属にする案を丸田は考えついた。会長室の隣りにある小会議室をつぶして、あの女医を常駐させる。いざという場合、あの女医にすべてをまかせた方がよい。秘書課長は、会長と社長の双方の手足とならねばならないが、退院後が心配な会長の面倒を全部見るのでは神経が安まる時がない。

女医を会長専属にむかえる案に頭を使いながら、もとの所に戻ってみると、社長はいなかった。廊下にいる役員の一人は、院長に会いに行っている、と丸田に教えた。

十分ほど経って、卓雄は院長室から出て来た。

「院長も、さっきの女医と同じことを言った。いまは応急手当ての結果、危険な状態ではないので安心していいそうだ。丸田課長、娘はどうしている？」

「芸大からこちらに向かっておられます」

「そうか。娘が来るまで、わたしはここにいる。きみたちは、会社に戻って、みんなに心配はいらん、平常通り仕事をするように言いたまえ」

卓雄に命令口調で言われ、役員と丸田らは福原病院を出た。会社さしまわしの車の後部座席に役員がすわり、運転手横の席に丸田が乗った。丸田は、すぐに女医の顔を思い浮かべ、社長を説得して、どうしても会長専属にしようかと決意した。支度金に一千万円やそこらを払ったとしても、あの女医ならおそらく会長も気に入るに違いない。

2

丸田は、会長が脳血栓で倒れたのを機会に、秘書課長は社長専属になるべきだと思った。会長と社長は親子とはいえ、巨大な機構の運営をめぐって、時には意見が相違することもある。それに、三代目の社長は、祖父や父に負けてはおれぬという自負心が強い。四十三歳の若さにものを言わせ、行動力にも自信がある。いちいち会長の許可を得なければ新規事業計画も建てられないのでは、社長の実権を会長がにぎっているようなものだ。会長、社長の二人の秘書課長ではなく、社長の秘書課長として、社長にだけ忠誠を誓った方が、こんごの立身出世につながる。社長は若いし、先が長い。会長はいつまたぶっ倒れて執務不可能になるか、知れたものではない。仮りに、今度の手術が成功しても、髪がはえ揃うまでは退院できまい。半身不随とまではいかなくても、言語障害が残るかもしれぬ。

会長が退院後、秘書課員を増員してでも、専属の会長秘書を置き、秘書課長は、できるだけ会長のそばにいないようにしたい。会長をタナ上げ状態に置くのにいまがチャンスだ。そう丸田は考え、会長が退院後は、二十四時間を三人の秘書が分担して、身辺の事務処理の手伝いなどをやらせる案を練った。女医は会社内での会長の健康管理を受け持つとして、自宅ないしは通勤途中も、秘書が会長から眼を離さないようにする。

会長秘書の三人は、社内の派閥関係にあまり関心を持たない青年にしたい。会長宅に泊まり込む深

夜勤務が出来るのは、独身者で健康な者となる。秘書課員には、そうした適格者はいないので、他の部署から連れてくる必要がある。彼は、壁ぎわに役員の在室を示すランプがあるのに視線を移し、取締役開発部長の稲葉義之に相談するのを思いついた。

稲葉は会長からうとまれ、その反動もあって社長派でこり固まっている。開発部の実績をあげ、常務へ昇格する野心に燃えているのも、この際相談相手としては格好の人物である。秘書課増員と新しく女医を雇用する案は、役員稟議が必要だろうから、全役員の承認を得るためにも、稲葉に根回し役を買ってもらわねばなるまい。

彼は二階下の稲葉のフロアまで階段を下りて行った。エレベーターで余人に会いたくはなかった。稲葉は開発部の奥まった机で電話中だった。電話が終わると、すぐに会長の容体を訊ねた。

「その件で、少しこみ入った話があるのです」

丸田は、部長の机の向こうにある応接室に歩きかけていた。大部屋の視線のある所で話せない内容という気がしたのである。

応接室で向きあつてすわると、会長の容体を説明し、美人の女医を会長の健康管理役として雇う案と、三人の秘書によって二十四時間、会長を監視する案を喋った。

「会長の監視役かい？　すると、会長のことを通報してくれる秘書だと適役だね」

稲葉が乗気なのに気をよくして、丸田は、

「若くて飲み込みの早いのを三人、開発部から出していただけませんか？」

と頼みこんだ。稲葉は少し考え込んでいた。人選にかかった、と丸田は判断したが、丸田とは違った意見を稲葉は言い始めた。

「開発部から三人出すのはまずいよ。会長の身辺を開発部で封じ込めたと、とられる恐れがある。開発部から出すとするなら、一人だよ」

「でも、開発部は、若い人材をもっと多くかかえこんでいるじゃありませんか？」

「いや、そんなことより、社内の眼だよ。変な眼でみられたら、元も子もない」

社長派で固まっている稲葉は、会長の先行きが短かくなつた今こそ、慎重に動くべきだと考え直したようだ。

「人事部長にも、各部から適任者を出すよう仕向けるつもりですが、開発部からは一人はぜひお願いします。わたしとしまして、稲葉さんの意中の秘書だと安心しておれます」

「人事部長を通すと人選が厄介になる。会長秘書はきみの所管なのだから、きみの方で適当に人選して人事部長の事後承諾を得てはどうかね」

「そう致しましょう」

「いま、わが部からの推薦者をきめるよ。ちょっと待ってくれ」

速戦即決型とでも言おうか、稲葉はてきばきと事務を片づける歯切れのよさを持っていた。それが三代目社長のお気に入り入りの所でもある。人事カードを机にもどって取り出した稲葉は、独身者が連らなっている後の方を捜し始めて、こう告げた。

「佐竹昇、二十五歳、これにする」

丸田は言われた通りの名前をメモにした。メモを終えた丸田に、稲葉は、

「いまはクローラー事業部にいるが、友人の紹介で入社した時から知っている浜村和樹、二十六歳も、ハキハキした男だよ。あの男なら、十分、会長監視役がつとまる」

「会長監視役は要職ですからな」

苦笑しながら丸田は浜村の名前もメモした。

丸田は、あと一人は人事部長に選ばせるつもりになって、稲葉と別れ、こんどは秘書課と同じフロアにある人事部へと足を運んだ。

取締役人事部長の水谷実は、どちらかといえば会長派であるだけに、丸田は会長に不測の事態が起きる場合にそなえ、会長のためを思えばこそ、こうした案をたてたと言いたてて、ほぼ内諾を得た。秘書は、気むづかしいところのある会長の機嫌を損わないよう、細心の注意を払わねばならないので、その適任者は、秘書課長が二人までは選ぶが、あと一人を頼むとまで言っておいた。稲葉と話しあった内容をもし水谷が知っていたら、すべての計画は潰されるであろう。こうなれば狸と狐の化かしあいみたいなものだ、と腹のなかでは思いながら稟議の内諾まで得た。自席に戻った丸田は、小肥りした牀に活力が漲ってくるのを覚えた。

3

達介は、恐ろしい夢を見た。山という山が爆発し、火の塊が降り、地が裂け、地獄図絵のなかを駈けていた。つまずいて倒れた。人の死体のなかにわが身は埋もれ、悲鳴を上げたが声が出ない。背中に向かって石の礫が降ってきた。死体のなかに顔を突っこみ、耳を掩った。急に付近が静かになったように、恐る恐る顔を上げた。背後のビルがあつという間に倒れ、ビルのはるか上から怒り狂った大津波の波頭が白い牙をむいて襲いかかってきた。逃げようにも足が立たない。

地球がひっくり返った！ 耳を掩つても悲鳴が頭脳を叩きのめす。大洪水に飲まれる、早く逃げねば、と心臓は破裂しそうになるまで脈打ち、五体を恐怖が駆け抜ける。大洪水は、ビルというビルを押し倒し、おびただしい木材や調度品を屑にして飲み尽し、すぐそこまで迫ってきた。見上げるほど高いところに波頭があつて、三十階建てのビルもひと飲みである。駈けて逃げたところで、洪水が襲うスビードには敵わない。人体はまるでケシ粒ほどの存在だ。大地が真っ二つに割れ、ケシ粒が地の底に落ちて行く。奈落の底は闇の世界である。ふわっと体が浮いて、眼がさめた。

恐る恐る眼をあけた。すぐそばに卓雄がいた。

「おとうさん！」

まさしく夢を見ていたのだ。薄目のまま、卓雄のそばの麻里を見た。つぶらな瞳が輝いている。手をのばそうとしたが、思うように動かない。

「おじいさん！」

麻里の少女らしさが残っているかわいい声が、生きていると証明してくれた。ああ、生きていた！ 達介は微かに頷いた。麻里の横には、卓雄の妻の蓉子が立っている。その向こうに白衣の美人がいた。看護婦か女医だろうと達介は思った。麻里より七、八歳年上なのがわかったが、麻里よりもずっと落ち着きがあり、どこかに職業人らしい雰囲気漂っている。それにしてもなんと美事に整った顔であろう。その女性の向こうにいる秘書課長の丸田の顔が豚のように思えるほど、女らしい美しさに満ちていた。

眼を卓雄の方へ戻した。

「気がつかれましたね。よかった」

卓雄の少し上ずった声で、眼をさらに天井に移し、上目使いに、眉のすぐそばまで包帯が巻かれているのを確認した。

「アタマなのか？」

小声で卓雄に訊ねた。

「ええ、手術は成功したのですよ」

「セ、イ、コウ？」

口を動かしかけて、変なものが鼻にさしこまれているのがわかった。酸素を補給していると判断した。